

京極読書新聞 <第45号>

京中生に インタビュー 2013

第1回

発行日 平成25年 5月 1日(水)
京極町生涯学習センター湧学館

今年も「京中生にインタビュー」の春がやってきました。今を生きる中学生たちは、どんな本を読んでいるのだろうか？ <編集部>

船場大地くん(1年)「松井秀喜」 グライナー ニコラス 颯太くん(1年)「ライト兄弟」

——中学校の新しい生活、どうですか？

船場 ようやく慣れてきたところです。まだ、図書室は使ってないけれど。

グライナー 僕たちは生徒数が少ない南京極小学校から来たから、こんなにたくさんの生徒がいる学校に、まだ少しびっくりしています。

——「ライト兄弟」面白かったです。グライナーくんの感想文がなかったら、一生読まないで「飛行機を発明した人」とか、わかったような知識で満足していたかもしれない。

グライナー ライト兄弟の物語の良いところは、兄弟そろって「失敗してもあきらめない心」を持っていることです。子どもの頃、父からおみやげでもらったヘリコプターのおもちゃが、大人になっての「空を飛ばしたい」という大きな夢に無理なくつながってゆくところがすごいと思いました。

——あんまり、くじけたり、いじけたりしないよね。

グライナー 小学校の時、先生が「失敗しても、それを次に活かして成功にかえれば、その失敗は、良い失敗になる」といつも言われていたのですが、ライト兄弟の伝記は、その「あきらめない」生き方を具体的に見せてくれたように思います。僕の今の夢はアメリカン・フットボールの選手になることです。今、僕の周りにはアメフトのクラブもないのだけど、それをマイナスとせず、今の自分のできるトレーニングをして体をきたえたいです。

——将来の、別の大きな夢につながっているのかもしれないね。松井秀喜の「プロ野球選手」だって、最初は、小学6年生の漠然とした憧れにすぎなかったんだから。

船場 松井選手も、「最後まであきらめない」人だと思いました。特に、大けがからリハビリで立ちなおってくる姿がすごいです。お父さんから贈られた言葉「努力できることが才能である」を、そのまま生きているように思いました。

——本(伝記)の良いところは、松井選手の「才能」を、目に見えるわかりやすい形で教えてくれるところですね。6年生まで柔道をやっていたとか、モーツァルトが好きとか、数学が得意だったとか、思ってもいなかった松井秀喜イメージがいっぱい出てきて、それら全部を含めて松井秀喜という人の「才能」なんだということがよくわかりました。

船場 それと、まわりの「支えてくれる人」の存在も大きいと思います。両親の他にも、松井選手の才能を信じて支えてくれた人たちがいっぱいいました。例えば、中学生野球の時に、打席に立つと毎回「敬遠」されるくらいのバッターになっていたのですが、「どうとう勝負しろよ！」と松井選手は怒ります。相手投手をにらみつける松井選手の態度を見て、すぐに駆け寄ってきて「なんだ今の態度は！敬遠は、ちゃんとした作戦の1つだ！思いあがるな！」ときびしく注意してくれたコーチの話がとても心に残りました。

——最後に。南京極小学校の生徒は、読書感想文コンクールでも毎年たくさんの受賞者が出ていますけど、なにか秘訣があるのでしょうか？

船場 そんな特別なことはやってなかったと思います。でも、伝記の本は読書感想文が書きやすいよ…とか、そういうアドバイスをよく先生からもらいました。

グライナー 給食も全学年・全先生いっしょに食べますから、そんな中で、「どんな本にしようかなあ」とか兄弟や友だちで話したりしました。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。



左：グライナー ニコラス 颯太くん（1年）
「少年少女伝記文学館 18 ライト兄弟」
（講談社，1988）

右：船場大地くん（1年）
「スポーツスーパースター伝 1 松井秀喜」
（ベースボール・マガジン社，2010）



左：藤村梨乃さん（1年）
「マリと子犬の物語」
（汐文社，2007）

右：黄金崎樹菜さん（2年）
「ロックとマック」
（角川書店，2012）

黄金崎樹菜さん(2年)「ロックとマック」 藤村梨乃さん(1年)「マリと子犬の物語」

——「ロックとマック」、とても面白かったです。なにが面白って、ロックとマックが二人(二匹?)で会話をするんだよ!

黄金崎 そうなんです。動物保護団体がつくった犬の避難所で、犬たちが、「マックはどうしてここに来たの?」とか、「うん。にぎやかで楽しかった。でも、あの地震で島に津波が来て…」とか、犬としての会話をします。ごく自然に読めてしまうんですけど、よく考えたら、すごく変ですよ。

——めずらしい小説だと思います。例えば宮沢賢治やイソップの童話なんかには、動物たちが会話をする場面がいっぱい出てきますけれど、その言葉は「擬人化(ぎじんか)」といって、動物の口を借りた、人間社会の言葉や会話であるわけです。

黄金崎 ちがいますよね。犬のロックとマックが、犬として被災した東日本大震災を語り、犬としての自分の将来を思うのですから。

——「お母さんに会いたい…」みたいに、ロックやマックの視線から飼い主たちが描かれているのもとても新鮮です。

黄金崎 私も犬を飼っています。きっと犬を飼っている人なら誰もが、自分は犬の気持ちはわかっていると思っているだろうし、犬も自分の言っていることはなんとなく理解しているだろうと思っているでしょう。でも、実際には、犬も人間も、互いの言葉を百パーセントわかるなんてことはないわけで、だからこそ、もっともっとふれ合って、かわいがって、犬の気持ちになって、この両者の壁が縮まるようにしなければいけないとこの本を読んで感じました。

——東日本大震災から、もう2年という時間がすぎています。藤村さんの「マリと子犬の物語」は、その大震災の7年前、2004年10月に起こった新潟県中越地震の山古志(やまこし)村が舞台ですね。

藤村 捨て犬だった「マリ」が、運良く亮太と彩の兄弟に拾われます。小さい時に母を亡くしたこの兄弟にとって、この捨て犬の命を見過ごすことはどうしてもできなかったのでしょう。

——このマリが、今度は、中越地震で倒壊した家の瓦礫の中から彩とおじいちゃんを助け出す大活躍をするわけですからね。

藤村 「命のつながり」とか「命の大切さ」ということを感じます。マリはとても頭の良い、やさしい犬です。一度は人間に捨てられたのに、その人間たちを必死で助けようとしてました。そして、村の人たちが他の町へ避難して行って、誰もいなくなった山古志村で、自分の子どもたち、グー・チョキ・パーの三匹を守りぬきます。本当に、マリの行動からは「命の大切さ」を深く考えさせられます。

——この「マリ」の物語には、じつは「続き」があるんですよ。

「ロックとマック」の第二章は「福島のみみ」というお話です。福島県富岡町の動物病院でお産をひかえていたフレンチブルドックのみみ。でも、福島第一原発の事故が起こり、富岡町は立ち入り禁止区域になってしまいます。誰もいなくなった、食べ物も尽きた病院の中で、みみは一人で(一匹で?)お産することを余儀なくされます。この重大な場面で登場するのが、同じ病院に入院していた「マリ」というおばあちゃん犬なんです。

藤村 すごい偶然ですね。

——マリが、最後のおつとめ。これから生まれようとしているみみの新しい「命」を助けようと、老体に鞭打って最後の力を振り絞ります。(あまり「感動」という言葉を安っぽく使いたくはないけど…)このお話には正直感動しましたね。今、私の頭の中では、二冊の本が合体して新しい「マリ」の物語が誕生したところです。



羊蹄山の麓で

〈連載〉

第2回 倶知安町

深澤正之「一握の砂より」

新谷保人(湧学館司書)

北海道は石川啄木のファンが多いことでも知られています。明治末期、啄木が一年間放浪した函館～札幌～小樽～釧路の街はもちろんのこと、倶知安にも「倶知安啄木会」があるんですよ。その倶知安啄木会が、倶知安駅前に建てた歌碑があります。かかっている歌は、

真夜中の
倶知安駅に下りゆきし
女の髪(びん)の古き痕(きず)あと

という一首。これ、とっても重要な歌です。私たちが知っている啄木作品というものは、北海道放浪から戻って、東京小石川で死ぬまでのわずか数年の間に爆発的に書かれたものがすべてなのですが、この「真夜中の倶知安駅…」の歌は、その大爆発の始まりを告げる烽火(のろし)のような歌なのです。ここから「石川啄木」ワールドがはじまるぞ！と。その歌に「倶知安」の名が刻まれていることがちょっと嬉しい。

…ということは、この「京極読書新聞」紙上でももう何回も書きました。「またかよ」と飽き飽きしている人もいるかと思いますが、今日は、少しちがった角度から、この歌を考えてみます。

あす芸能発表会

【京極】町文化協会主催の芸能発表会が10日午前10時半から、町公民館で開かれる。町内の合唱団など計13団体が練習の成果を発表するほかに、ピアノ講師深澤正之さんが石川啄木の短歌にメロディを付けた創作曲を披露する。

(北海道新聞 2013年3月9日 小樽後志版)

深澤先生がこの歌に曲をつけました。そして、芸能発表会の当日。「♪真夜中の…」の歌声が京極の街に流れたのです。なんと誇らしい気持ちになりました。

この歌のどこがよいのか？ 啄木の研究者たちは声をそろえて「ズームレンズ」と言っています。そう、啄木は「目」が鋭いんです。「眼」が特殊だと言ってもいいかもしれない。例えば、この歌。「真夜中」→「倶知安駅」→「女」→「髪」と、啄木のカメラレンズは急角度でズームアップをつづけ、ついには「古き痕あと」のピンポイントまでたどりつきます。

「一握の砂より」の一番の歌詞「東海の…」も、そうですね。「東海」→「小島」→「磯」→「白砂」→「われ」→「蟹」と、啄木の眼光は冴えわたります。啄木の歌の情景描写が際だって美しく感じられるのには、こんな秘密があったのですね。

カメラが一般に普及する昭和の遙か以前、明治の時代にこんな感覚を持っていた人がいたなんて本当に驚きます。その名歌に深澤先生の美しいメロディがついたのですから、これはまさしく鬼に金棒。またひとつ、京極発の芸術作品が誕生しました。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

